



プロジェクトニュース

シエラレオネ 地域開発能力向上 (CDCD) プロジェクト

「エボラの経験が残したもの」号

2018年1月11日号 (Vol.52)

シエラレオネにおいて、2014年から2015年にかけて流行したエボラ出血熱により、約4,000名が命を落とした事が記憶に新しい方もいらっしゃるかもしれません。

エボラが現地の人々に与えた影響は、生死に関わることだけではありません。エボラが大流行していた当時、他者との接触を最小限にするため外出が制限されました。外出が制限されることで、日銭を稼ぐための商売や農業活動が制限され、せっかく栽培していたイネ等の収穫を諦めざるを得ない状況にもおかれた人もいたといわれています。飢えを凌ぐために種子として残していたコメを食べたり、財産である家畜を売って現金を獲得したり、エボラが終わったときには財産を食い尽くしている状態となっていた住民は少なくありませんでした。ビジネスや農業を再開するための現金や種子がない状態から生活を立て直すのは、容易なことではなかったと想像します。

2017年11月下旬、ポートロコ県及びカンビア県において、2016年度に道路、小学校、保健施設等の整備をパイロットプロジェクトとして実施した対象地域を訪問し、エボラ終息宣言から約2年が経過した現地の状況を調査しました。聞き取りの結果、2年近くが経過した今も、エボラ以前の生活水準に戻っていない村もあることがわかりました。エボラ終結後に、村の長老が取りまとめて、隣村からローンで種子を借り付けて農業を再開しているものの、エボラ前の生活水準に戻るにはまだ時間がかかりそうです。その一方で、エボラの発生を機に多くの外部からの支援により、エボラ以前よりも生活水準が上がったという村もありました。支援の多さは死者数や感染者数といったエボラ被害の大きさに必ずしも比例しているとはいえない気がします。その差は一体何なのでしょう。政治家の声の大きさ？それともアクセスの良さ、でしょうか。

経済的な状況のほかにも、エボラの感染を恐れて食事の前やトイレの後に手洗いをするようになった、屠殺された動物以外は食べないようになった、病気になった際に伝統的治療師を頼らないようになった等の行動変容も聞かれました。伝統的治療師は村人だけを相手にしては生計が立てられなくなったため、今では人が多く集まる市場等に赴き、薬草等を売っているようです。

そのほかにも、感染拡大の原因といわれている素手で遺体を清める埋葬方法ですが、聞き取りを行った村々では現在も同様の方法がとられています。しかし、現在は保健機関への報告が義務付けられて

おり、感染が疑わしい遺体については保健機関が検査した後でないとは埋葬することができないようになっています。このように、エボラの経験は人々の習慣を少しずつ変えてきたことがわかります。

調査中、パイロットプロジェクトが与えた影響も語られました。特に印象的だったのは、道路改修のパイロットプロジェクトを行った地域での聞き取りです。県の中心部から車で 1-2 時間にもかかわらず、以前は救急車を呼んでも村に到着するのが 5-6 時間後、ひどい時には翌日に来るような状況であったものが、今では 1-3 時間くらいで到着するようになり、エボラを含む急病への対応や、無駄に命を落とす人が減ることが期待されるとの声が聞かれました。

改めてエボラのことを聞くと人々はいろいろなことを語ってくれますが、エボラのことを嘆きながら生きているようには見受けられません。西アフリカではそれまで経験のなかったエボラが猛威を振るった出来事は、間違いなく相当の衝撃をシエラレオネの人々にもたらしました。日本人の感覚からすると、もっと生活の隅々にエボラの影響が現れてもおかしくないように感じてしまっていますが、人の死というものが我々よりも身近にあるシエラレオネの人々にとっては、エボラもまた、生活の中に起こりうるものとして受け入れられたということなのではないでしょうか。シエラレオネの人々の生きる力を感じます。



整備され掃除の行き届いた小学校
手洗い用のバケツもある



整備された教室で“手洗いの歌”を
歌う小学生



道路が改修されたことで扱う商品が増
えたというキオスクでの聞き取り